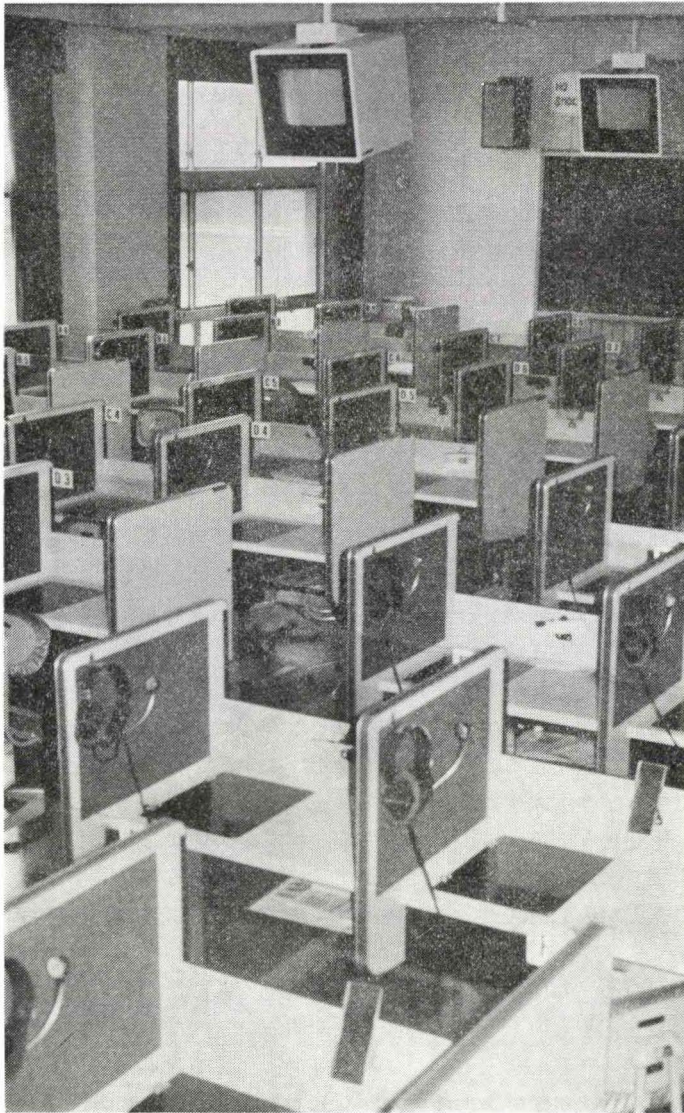


京大広報

No. 232

京都大学広報委員会



教養部 A 322 教室（フルラボ）—関連記事本文223ページ—

目次

卒業式における総長のことば
 総長 沢田 敏男…… 216

昭和57年度入学者選抜
 学力試験の結果…… 218

昭和56年度修士学位授与式…… 219

昭和56年度卒業式…… 219

昭和56年度医療技術短期
 大学の卒業・修了式…… 219

部局長の交替…… 219

薬学部矢島治明教授が
 日本学士院賞を受賞…… 220

原子炉実験所第16回学術講演会…… 220

<保健コーナー>
 糖尿病の話…… 221

<随想>
 京大病院の思い出
 名誉教授 稲田 務…… 222

<紹介>
 教養部・語学実習室…… 223

訃報…… 224

卒業式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男

本日、ここに昭和56年度卒業式を挙行し、2,462名の新しい学士を社会に送り出すことができますのは、京都大学のみならず広く社会にとっても大きい喜びであります。

諸君の卒業を祝い、その前途を祝福するためにご臨席いただきました本学名誉教授の先生方、各部長ならびに教職員の皆様に対しまして、卒業生の諸君と共に、心から感謝し厚く御礼申し上げます。

卒業生の諸君、おめでとうございませう。諸君一人一人にそれぞれのご苦心、ご苦労があったことと推察し、本日の卒業を心からお喜び申し上げると共に、今日、小学校から数えて16年或いは18年の長きに亘り、諸君の学業を支援して下さったご両親はじめ関係者各位に対しまして、卒業生の諸君と共にそのご厚志、ご恩に対して心からの敬意と感謝を捧げたいと存じます。

諸君が希望にもえて京都大学に入学してから4年或いは6年間、蛍雪の功なって今日ここに新しく学士号を得られたのでありますが、この間、いろいろの方法で学ばれたと思います。自ら学ぶことの楽しさをおぼえ、そして、いわゆる京都学派の学風を肌で感じ得た諸君もあるでしょう。また、勉学とスポーツとが両立するよう工夫し、日夜努力を重ねた諸君もあるでしょう。さらにまた、いろいろの理由により留年し、今日を迎えた人もあると思います。諸君は、在学期間中を顧りみて、それぞれ感慨に浸っていることと思いますが、諸君はいずれもめでたく新しく学士になられたのであって、京都大学の卒業生であるという自信と誇りをもって、実社会に向って力強い第一歩を踏み出すべきであります。

諸君のうちには、今後大学院に進学される方、実社会に出て活躍される方など、いろいろの進路を持たれることであらうでしょう。その人生航路への餞けとして一言申し述べてみたいと存じます。

大学の大きな使命とするところは、終生変わらず学ぶ心を持った若い人材を育成し、世に送り出すことでもあります。大学は、学問をし、真理を探求する場でありますから、在学中は諸君も当然のこととして学問に親しんでこられました。しかし、大学生生活を終えたからといって、学問を愛し、物事について学ぶという気持を放棄してはなりません。諸君が、一生を通じて知性をいつくしみ、学問を愛する心を抱き続けられることを念願するものであります。

過去久しく、日本人は「人生観」というものを大切に、それを指針として人生を生きるという習性を養ってきたと思います。「人生観」を欠いた人の一生は、首尾一貫した理想に貫かれることがなく、また、人々の心を打つような美しい充実にも恵まれることもありません。人生観を持ち合せない人間は、淋しい人生に終始することになるでしょう。人生に使命を与え、充実をもたらすためにも、かけがえのない自己の人生にどういう生き甲斐を与えるかについて、思索の習慣を大切にしたいと思うものであります。学問や知性を、大学で学んだ4年あるいは6年だけのものであると局限する考え方は、正しいとは申せません。人生の充実ないし意義づけのためには、終生変わらず学ぶ心を持ち続けることが必要であると思います。

私は、これまで日本の発展を支えてきたのは「知性主義」ともいふべき伝統であったと考えます。読書に親しみ、思索にふけり、人間社会を支えるものとしての知性を重んずる日常的な心掛け、こういう知性主義を一人一人の日本人が大切に遵守してきたこと、これこそが、今日の日本を造り上げた基盤的条件であったように思うのであります。科学技術の面をみても、過去約一世紀の間に進歩飛達を遂げ、今日では先進国のレベルにまで到達しました。これは、いつにもって日本人の勤勉・努力や創造・工夫によるもので、知性主義のもたらした成果であると申せましょう。

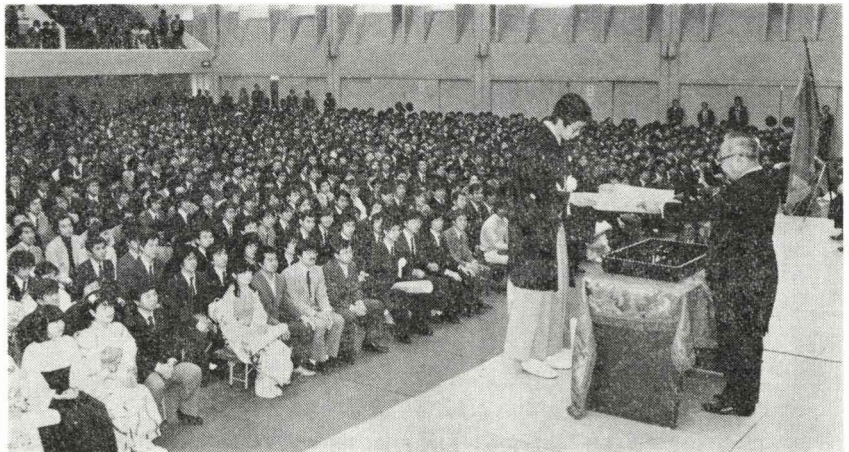
しかし、ここで留意すべきことは、科学技術の発達は、確かに人間生活を豊かにしましたが、一方人間としての善とか美とかを対象とする宗教、芸術、道徳等のいわゆる精神文化の衰退という憂うべき事態を惹起し、知性を重んじる習慣を喪失しつつあることです。さらに、我が国を含め多くの先進社会においては、『反知性主義』の流れの発生が懸念されています。反知性主義こそ、人間の崇高な精神や魂を冒し、世の尊い価値を踏みじめる危険性を秘めているものであり、現代先進社会において反知性主義の徴候のあることは、我が国はもちろん世界人類の将来にとって、由々しいことであるといわざるを得ません。

私が諸君になによりも期待したいのは、多くの先進社会が潜在的にもっているこの危険性、すなわち物質文明の爛熟の副産物としての『反知性主義』をしかと見定め、それと戦いそれを払拭してほしいことです。そして、これから先の社会を、諸君のもつ新鮮な知性で満たし続けてほしいと思います。

諸君は、今から18年後、40歳前後の人生の働きざかりに、21世紀の到来を体験することになります。そのような諸君が、終生学ぶ心を忘れず、日本の社会に知性主義を満ちし続けていくとするなら、諸君がこれから磨き上げる知性と理想は、21世紀における日本および世界の在り方を定めるうえで、決定的な意味をもつことになりましょう。これに反し諸君が、このような心掛けを怠るとすれば、今世紀から21世紀への歴史の橋渡しや、価値の継承に齟齬をきたすことになると思います。諸君の世代は、そういう意味で、重大な歴史的使命を負っていると申せましょう。

私は、昨年12月、本学工学部の福井謙一教授がノーベル化学賞を受賞された機会に、スウェーデン王立科学アカデミーの招きを受け、ストックホルムでの授賞式に参列する機会に恵まれました。その際、私は、ノーベル賞を守り育ててきたスウェーデンという国の偉大さを、改めて学ぶことができたのであります。知性と真理の探求ということに国家の存立を賭けているこの国の、深遠な決意のほどを知り、深い感銘を受けた次第であります。併せてまた、スウェーデンにおいて一般に抱かれている京都大学のイメージが、基礎研究を重視し、創造性を秘めた大学であるということを知り、このような京都大学の学風を培って下さった先輩各位に改めて深く感謝すると共に、今後ともこの学風を大切に守り通していくことの意義を痛感したのであります。すなわち京都大学は、独創性豊かな基礎研究やユニークな実証研究によって世界の学界と結びつき、その発展の一翼を担い得る立場にあるのです。諸君は、このような優れた学風をもつ学問の殿堂で学ばれたのであって、このことの意味を、いま一度改めて噛みしめてほしいと思います。

我が国が、これから先、活力ある福祉社会の実現を目指し、国際社会に対する貢献を増大していく道は、真理を探求し、基礎的な学術研究を重視する独創性豊かな科学技術国家となり、また、文化国家として、世界の国々から敬愛されるような国柄を形成することであると確信するものであります。しかし、このような日本の未来像は、少数のエリートや先端科学者だけで実現できるものではありません。国民のすべてが、学問を愛し、その尊厳を認識し、知



性主義の伝統を重んじることによって、はじめて実現可能なことです。

終りに再度、諸君に望みたいことは、かけがえのないこの人生に意義を与えるためにも、終生学び続ける心構えをもってほしいということでもあります。そうすることによって、諸君は、日本の知性主義の伝統を生かし続け、同時に日本の新しい国柄形成という重大な役割を担い得ることになると信じます。

どうか諸君、健康にくれぐれも留意すると共に、母校京都大学をいつまでも心の中に抱いて歩いて下さい。京都大学もまた、諸君一人一人の歩みをいつまでも見守りつづけることでありましょう。

諸君の栄えある門出に当り、心より祝意を表すると共に、一言私の所感を申し述べて餞けの言葉といたします。

(本稿は、3月24日の卒業式における総長のことばを速記をもとにしてまとめたものである。)

＜大学の動き＞

おりである。

昭和57年度入学者選抜学力試験の結果

3月4日(木)と5日(金)の2日間にわたって行なわれた昭和57年度入学者選抜学力試験の合格者氏名が、3月18日(木)に学部ごとに発表された。

募集人員は2,526名で、各学部における審査の結果、合格者数は募集人員どおりの2,526名となった。

学部別の受験者数および合格者数等は次表のと



学 部	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	倍 率	欠席率 (%)	合格者数	合格者得点		備 考 (満点)
								最 高	最 低	
文 学 部	200	791	—	762	3.8	3.7	200(65)	887.67	744	1,100
教育学部	50	135	—	134	2.7	0.7	50(12)	962	866.5	1,150
法 学 部	350	875	875	863	2.5	1.4	350(33)	988.5	858	1,150
経済学部	200	752	—	729	3.6	3.1	200(11)	985.17	838.99	1,200
理 学 部	281	968	959	930	3.3	3.0	281(18)	910	748.75	1,050
医 学 部	120	322	—	301	2.5	6.5	120(7)	1,130	998.5	1,250
薬 学 部	80	131	—	127	1.6	3.1	80(34)	1,051	837.5	1,250
工 学 部	945	1,880	—	1,861	2.0	1.0	945(15)	1,134	812	1,250
農 学 部	300	534	—	527	1.8	1.3	300(35)	1,045	788	1,250
計	2,526	6,388		6,234	2.5	2.3	2,526(230)			

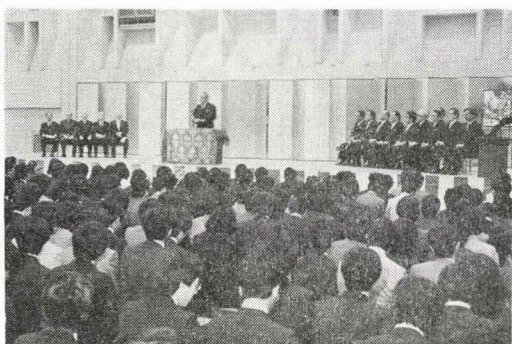
- (注) 1. 受験者数・欠席率は最終教科についてのものである。
 2. 合格者数の()内は女子、内数である。
 3. 法学部の合格者数の内15名は、特別選抜合格者である。
 4. 第1段階選抜合格者数の — は第1段階選抜を行なわない学部を示す。

昭和56年度修士学位授与式

3月23日(火)午前10時から、昭和56年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授など来賓の臨席のもとに学位記授与が行なわれ、「総長のことば」があつて午前10時35分に終了した。

修士課程修了者は、文学研究科57名、教育学研究科15名、法学研究科16名、経済学研究科16名、理学研究科124名、薬学研究科27名、工学研究科532名、農学研究科103名の計890名である。



3月23日，修士学位授与式

昭和56年度卒業式

3月24日(水)午前10時から、昭和56年度卒業式が、本学総合体育館において挙行された。

卒業式は、名誉教授など来賓の臨席のもとに行なわれ、学歌斉唱、合格証書授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前10時45分に終了した。

新学士は、文学部222名、教育学部50名、法学部372名、経済学部202名、理学部284名、医学部116名、薬学部78名、工学部847名、農学部291名の計2,462名である。

昭和56年度医療技術短期大学の卒業・修了式

医療技術短期大学部では、3月20日(土)午前10時から、本短期大学部大講議室において来賓・父兄等臨席のもとに、看護学科、衛生技術学科卒



3月20日，医療技術短期大学部卒業・修了式

業式及び専攻科助産学特別専攻修了式を挙行した。

式は卒業証書及び修了証書授与、「学長のことば」、「主事のことば」、来賓祝辞と進行し、午前10時35分終了した。

この日新しい門出を迎えた者は、看護学科57名、衛生技術学科34名及び専攻科助産学特別専攻19名である。

(医療技術短期大学部)

部局長の交替

教養部長

繁澤和夫教養部長の任期満了に伴い、その後任として渡邊 實教養部教授(文学担当)が4月1日任命された。任期は、昭和58年3月31日までである。

化学研究所長

高田利夫化学研究所長の任期満了に伴い、その後任として藤田榮一化学研究所教授(生理活性研究部門担当)が4月1日任命された。任期は、昭和59年3月31日までである。

人文科学研究所長

福永光司人文科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として上山春平人文科学研究所教授(宗教史研究部門担当)が4月1日任命された。任期は、昭和59年3月31日までである。

附属図書館長

林 良平附属図書館長の任期満了に伴い、その後任として高村仁一工学部教授(結晶塑性学講座担当)が4月1日任命された。任期は、昭和59年4月1日までである。

薬学部矢島治明教授が 日本学士院賞を受賞

このたび、薬学部矢島治明教授に日本学士院賞が授与されることになった。授賞式は6月上旬、日本学士院会館で行なわれる予定である。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介する。



矢島治明教授は兵庫県出身、昭和25年京都大学医学部薬学科を卒業、26年大阪大学薬学部助手、31年ピッツバーグ大学生化学教室に留学、ついで35年同研究助教授、37年京都大学薬学部助教授を経て、昭和48年本学薬

学部教授（薬品製造学講座担当）に就任し現在に至っている。

同教授の今回の受賞の対象となった研究課題は「ウン酢臓リボヌクレアーゼAの全合成とその結晶化に関する研究」である。リボヌクレアーゼAは124個のアミノ酸からなり、この構造研究でロックフェラー研究所のStein博士、Moore博士はノーベル賞を受賞している。酵素蛋白質の有機化学的合成は、E. Fischer博士以来ペプチド合成化学者の長年の懸案であったが、同教授は置換ヒドラジンをを用いる新しい縮合法、有機スルホン酸を用いる最終脱保護法等ペプチド合成化学上独自に新しく開発した種々の方法を応用し、また問題となる種々の副反応を解決し、これらの研究を

集大成することにより、全活性を有する酵素蛋白質を世界で初めて全化学合成し、ついにこれを結晶体として得ることに成功した。

同教授は上記の酵素合成研究以外に、昭和36年にはピッツバーグ大学 Hofmann 教授とともに副腎皮質刺激ホルモン (ACTH) のアミノ末端23個のポリペプチドを合成し、世界で初めてACTHの活性部位の存在を明らかにした。帰国後、本学薬学部において、日本のペプチド合成化学の草分けとして、各種動物のACTH、メラニン細胞刺激ホルモン、視床下部ペプチド、その他モチリン、ガストリン放出因子等の消化管ホルモン等多くのペプチドホルモンの世界最初の合成を行ない、多くの論文、著書を発表し、その業績は海外でも高く評価されている。

昭和39年、「ACTH活性ペプチドの合成研究」により日本薬学会学術賞を受賞し、ついで昭和52年、「生理活性ペプチドの合成研究」により有機合成化学協会賞を受賞している。

同教授はこれらの研究のかたわら、国内では第12期日本学術会議会員として、国際的には医学部早石修教授について、昭和55年米国国立衛生研究所 (NIH) の Fogarty 国際学者 (Fogarty Scholar-in-Residence) に選ばれている。

以上のような同教授の輝かしい研究・教育上の業績を考えると、今回の受賞はまことによろこばしい。

(薬学部)

<部局の動き>

原子炉実験所第16回学術講演会

原子炉実験所では、恒例の学術講演会を、3月19日(金)午前9時から午後6時まで、原子炉実験所附属原子炉応用センター大講習室において開催した。全国の共同利用研究者をはじめ学界各分野から多数が来聴され、盛会であった。

演題と講師は次のとおりであった。

I. 特別講演 「原子力と医学」
中性子放射化分析の医学への応用——正常成分としての金属と生体機能——

武内孝之, 松原純子(東大医)

生命の起原・進化の実験研究——核生物学からのアプローチ——

赤星光彦

悪性黒色腫の選択的原子炉療法

三島 豊・市橋正光・辻 正幸(神大医), 鈴木立雄(麻布大獣医), 神田啓治

悪性脳腫瘍の低速中性子捕捉療法——過去13

年間の臨床経験—— 畠中 坦(帝京大医)

核分裂中性子照射によるラット乳癌の誘発と

ホルモンによるその修飾 横路謙次郎・

瀬山敏雄(広大原医研), 神田啓治・古林 徹

広島原爆の誘導放射能の測定と原爆線量の再

評価 竹下健児・星 正治・加藤一生
・竹岡 清二 (広大 原医研), 小川 正晃 (広大歯),
鶴田隆雄

II. 一般講演

生体内における Au の挙動と作用

片山洋子・小松啓子 (大市大生活科学), 檀原 宏
(農水省九州農試)

母体を介して取り込まれたトリチウム化チミ
ジン及びトリチウム水のマウス新生児にお
ける分布 齊藤真弘, G. Streffer・

M. Molls (西独エッセン大)

原子炉材料中の高速中性子スペクトルの測定

と解析(3) 木村逸郎・林 修平・小林捷平・
山本修二, 森 貴正・金沢 哲・西原 宏 (京大
工), 中川正幸 (原研東海研)

KUCA における中濃縮ウラン燃料を用いた

臨海実験 神田啓治・代谷誠治・林 正俊・
中込 良広・小林 圭二・嵯峨根 俊光・柴田 俊一,
M. M. Bretscher (米国アルゴンヌ国立研)

UAlx-Al 型板状燃料小片の照射後試験——

温度上昇による核分裂生成物放出実験——

玉井忠治・林 正俊・三島嘉一郎・嵯峨根俊光・
吉田博行・神田 啓治・柴田 俊一, J. C. Posey・
S. J. Rimshaw (米国オークリッジ国立研)

Ho-軽希土類二元合金系における HCP 相

の磁性 川野真治・阿知波紀郎

中性子回折による i-エリストールの水素結

合の研究 岩田 豊・小谷野信光・

渋谷 巖, 福代 誠・広津 建・田草川房夫・樋口
泰一 (大市大理)

MgO 単結晶中の照射欠陥

岡田守民・

中川益夫, 盛山武祥・奥田修一 (大阪府立放中研)

酸化リチウム (Li₂O) の原子炉照射損傷

跡部紘三

小角散乱用熱中性子チョッパの性能 小野正義

敦賀原発一般排水路の放射能測定 小出裕章・

今中 哲二・海老沢 徹・川野真治・小林圭二・
瀬尾 健, 久米三四郎 (阪大理)

(原子炉実験所)

保健コーナー

糖 尿 病 の 話

生活水準の向上につれて、日本における糖尿病
患者の数は増加の一途をたどり、現在では300万
人を超えると推定されています。しかし、糖尿病
の正しい診断を受け、適切な治療を行なっている
人はそのうちの僅か15%程度と言われています。

糖尿病は膵臓から分泌されるホルモンであるイン
シュリンの作用が、いろいろな原因で不足する
ために起こる代謝異常です。



糖尿病と言えれば一般に成人病の一つとして知ら
れていますが、小児や児童・生徒、青年層にもみ
られ、全患者の10~15%を占めています。15歳未
満で発症する小児糖尿病は1万人当たり1~1.5人
の頻度と言われています。この小児糖尿病の中
には成人のそれと異なり、やせていて、発症が急激
で重症になりやすく、インシュリン治療を要する
病型(これを若年型糖尿病と呼びます。)が多い

ことが知られています。これらの患児が正しい治
療生活を身につけることができるように、糖尿病
サマーキャンプが全国的に企画されるようになり
、近畿地方でも毎年50~70人の小児患者が参加
しています。

年齢が長ずるにつれて糖尿病の頻度も高くなり
、学生層では1,000人当たり1~3人、40歳以上
でははるかに高い頻度になります。

成人になって発症する糖尿病の多くは一般に軽
いのが特徴で、発病が緩徐で、肥満者が多く、イン
シュリン治療を要する者は比較的少ないもの
です。(これを成人型糖尿病と呼びます。)そして
肥満、過食、精神的ストレス、感染症の罹患、頻
回の妊娠などが発症因子になることが多いよう
です。また、副腎皮質ホルモン剤の長期連用によ
って糖尿病状態が起こることや、体重4kg以上の巨
大児を生んだ母親が将来糖尿病になりやすいこと
も知られています。



糖尿病の治療の基本は食事療法と運動療法、即
ち日常生活の規制にあります。食事療法は甘い食

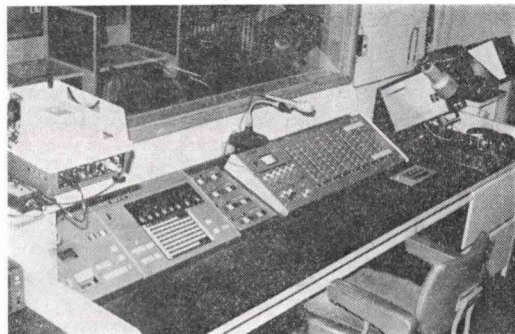
セットへの転換が実現した。テープレコーダーがほとんどカセットになっている現在、これで学生諸君の利用にも便利になった。

現在の設備は、60席の完全装備のフルラボ1教室、学生の席にテープレコーダーを置かない簡易ラボ2教室で、いずれも16ミリの映写設備とVTRを備えている。フルラボにはマイコンを組み込んだレスポンス・アナライザーがついている。そのほか準備室と録音室に、視聴覚教材作成用の各種機器が揃っている。昨年度はOMR（光学マーク読取機）を購入し、今年度から授業に活用する予定である。

保有教材は、録音テープが自作購入あわせて約5,000本、16ミリフィルム130本、VTRテープ60本、フィルム・ストリップ300本にのぼる。これらの教材は、LL設備のある教室だけでなく、普通教室での授業にも広く利用されている。

そのほか、教養部図書館の協力を得て、授業に関係のあるカセットテープや、まとまった外国語学習コースのテープの貸出しを行なっている。今回新たに設置された教養部図書館のLL（12席）で聴くこともできるし、期間を1日に限って館外貸出しも行なう。年間貸出数は2,600（昭和56年度）。学生諸君によく利用されていることがわかる。なお教養部図書館では、京大で授業の行なわれていないいろいろな言語の録音教材の貸出しも行なっているので、志ある人は大いに活用されることをおすすめする。

20年にたりぬ歴史であるが、その間にも事情の変化は著しい。テープレコーダーの普及、外人教師数の増加は、LLの役割に影響を与えずにはおかなかった。しかし、それより大きいのは、外国語教育の背景にある言語観の変化である。初期のLLで学習した人の中には、ヘッドフォンで他の



A322 教室調整室内部

音を遮断してたたきこまれる同一文型の機械的反复にうんざりした、という人もあろう。LLの出發そのものが、アメリカ構造言語学や、当時有力だった行動心理学と切り離せぬものだったのである。しかし現在では、人間の記号行動の全体性・創造性、言語記号の本性の理解が進み、外国語教育を単純で自己完結的な記号体系習得のモデルで考える時代は終わった。そのことが、LL利用の多様化、なかでも視覚面の重視に反映している。日常言語の本性である状況依存性を無視しては生きた言語学習はあり得ない。教養部語学実習室も、一昨年更新以来、とくに視覚教材・機器の充実を力を入れている。これはまたLLの世界的趨勢である。

情報工学の発達、ビデオディスクの開発などは、外国語教育にも大きな便宜を提供するであろう。他の国立大学では、すでに外国語専用に数億円のコンピュータを導入したところもある。しかしながら、計算機の扱えぬところこそ外国語教育の要なので、問題は簡単でない。われわれとしては、現在のところ、準備・研究おこたりなく、確実に有効なところには情報処理技術を取り入れつつ、慎重に方向を見定めているところである。

（教養部）

訃報

園原 太郎（本学名誉教授）

3月14日逝去、73歳。本学文学部卒。昭和28年本学文

学部教授就任、同47年退官。昭和55年勲三等旭日中綬章受章。専門は発達心理学。